

『私は誰?』イスラエルのアラブ人作家サイド・カシュア の小説における失われたアイデンティティの探求

細田 和江

非楽観屋のサイド、またの名をアブー・ナハスからの手紙に曰くー
・・・さて、この度それがし失踪した。死んだのではない。一部で
誤解されているように国境で殺されたのではない。わが徳をご存知の
方々がもしやお疑いのように抵抗戦士（フィダーイー）に加わった
のでもない。先生のお仲間が触れ回っているように、誰に顧みられる
ことなく独房で朽ち果てたりもしちゃいない。・・・それはさておき、
さておけないのがわが身が失踪するに至った奇っ怪な事情だ。先生、
待ち望んだ奇蹟がついに起き、俺は果て無き宇宙から飛来した生命体
と出遇った、この身は今まさに彼らとともにある。そうしてあんたが
たの頭上を飛び交いながら、驚天動地の秘密を書き送っているという
わけだ。

エミール・ハビービー

『非楽観屋サイドの失踪にまつわる不可解な出来事』
(山本薫訳 作品社、2005年)

父はこの夏に死んだ、
それから僕らの間にあった障壁はずっと崩れたまま
今、秋が来て、彼は扉のように立たずむ
僕の人生にある緩衝地帯の縁に一
彼の目の境界に・・・

アントン・シャンマース

「聖の入り口」、詩集『緩衝地帯』

・・・そして僕は緩衝地帯で白昼夢を見るのだ。
「それを見つめる13の方法」、詩集『緩衝地帯』

1. 序論

1948年イスラエルが建国し、パレスチナの地に住んでいた多くのアラブ人が祖地を追われ難民化した。「パレスチナ難民」とよばれた彼らは、その後周辺のアラブ諸国をはじめとして世界各地に散り散りとなる。他方で、イスラエル内に留まることのできたアラブ人は建国後イスラエルの市民となった。現在ユダヤ人が多数派を占めるイスラエル

において、およそ二割にあたる人びとはこうしたアラブ人である¹⁾。アラビア語を母語とし、イスラームやキリスト教などを信仰する少数派の市民である彼らは難民となったパレスチナ人とは区別されて、行政上は「イスラエルのアラブ人」(‘araviyei isra’el)、アラビア語では「48年のアラブ人」(‘arab 48)、「内側のアラブ人」(‘arab al-dākhil) と呼ばれている。

2. イスラエルのアラブ人による文学

パレスチナの地から多くのアラブ人が離散したことで、イスラエルのアラブ人の数は激減した。特に、ほとんどの知識人層が祖国を追われたことによって、彼ら独自の文化的な活動は停滞を余儀なくされた。それに加え、1966年まで続いたアラブ人に対するイスラエル政府の軍政²⁾のため、移動自体も大幅に制限されていた。

それゆえ、作家を含めたパレスチナ・アラブ人知識人の活動の中心となったのは、あくまでもディアスポラの地の人びとであった³⁾。そうした作家の一人であったガッサン・カナファーニー (Ghassān Kanafānī: 1936-1972) は当時のイスラエル (パレスチナ) における文学の状況について、イスラエル政府によるアラビア語書籍の言論統制が、かの地で良質な文学が生まれにくい要因となっていると、1967年にベイルートで開催されたAA (アジア・アフリカ) 人民連帯会議の基調講演で批判した⁴⁾ (カナファーニー 1966: 349-350.)。ただしこの講演でカナファーニーは、イスラエルに残された「アラブ人」詩人たちの抵抗詩こそがパレスチナの地において力を持っていることは高く評価している (カナファーニー 1966: 388-389.)。

カナファーニーが指摘した通り、当時のイスラエルのアラブ人による文学はマフムード・ダルウィーシュ (Maḥmūd Darwīsh: 1941-2008) やサミーフ・アル=カーセム (Samīh al-Qāsim: 1939-)、タウフィーク・ザイヤード (Tawfiq Zayyād: 1929-1994) らによるアラビア語詩が中心で、これらはイスラエルによるパレスチナ占領に対する抵抗詩という一つのジャンルとして大衆に人気を博した⁵⁾。

イスラエルにおけるアラビア語の出版は、イラク出身のユダヤ人⁶⁾を中心に、定期的に発行されていた新聞・雑誌によって支えられ、イスラエルのアラブ人はそこで作品を発表する機会を与えられていた。

60年代になると、こうした媒体で活躍した作家たちから長編小説も生まれるようになる。共産党員で国会議員でもあったアラブ人作家エミール・ハビービー (‘Imīl Ḥabībī: 1922-1996) が発表した小説『非楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事』(1974) は、パレスチナ文学のみならずアラブ文学の名作の一つとして評価が高い。他にも小説

家のタウフィーク・ファイヤード⁷⁾ (Tawfiq Fayyād: 1939-) や詩人のムハンマド・アリー・ターハー (Muḥammad ‘Alī Tāhā: 1931-2011) らによって、イスラエルにおけるアラブ文学が発展した⁸⁾。

現代ヘブライ文学もまた現代ヘブライ語の創成の過程で、19世紀後半はヨーロッパのディアスポラ⁹⁾ で、その後は建国前のパレスチナで発展を遂げていった¹⁰⁾。その初期の担い手はヨーロッパ出身のユダヤ人であった。イディッシュ語に代わるユダヤ人の国語となったヘブライ語は、世界中からの移民による多くの豊穡な文学を生み出した。

60年代、アラビア語で執筆するアラブ人作家の登場と時を同じくして、ヘブライ文学の世界にも、アラブ人によるヘブライ語の文学が登場した。ジャーナリストで教師でもあったイスラエル北部出身のキリスト教徒アッター (アターウッラー) ・マンスール¹¹⁾ (‘Aṭallah Maṣṣūr: 1934-) は『新たな光のもとで』(1966) で、イスラエルが建国した際の混乱で孤児となったアラブ人ユースフを主人公に、彼が父の友人であるユダヤ人の「息子」として、キブツにその居場所を求める姿を描いた。物語の構造は単純で、文学性が高いとは言えなかったが、作品はアラブ人初のヘブライ語小説として話題となった¹²⁾。マンスールに続いて80年代に出版されたアントン・シャンマース¹³⁾ (‘Anṭūn Shammaṣ: 1950-) の『アラベスク』(1986) は、その流麗なヘブライ語と、ポストモダン文学の影響を受けた文体、つまり語り手、時代が入れ子細工のように複雑に絡み合うメタ・フィクションの構成などにより、ユダヤ人をはじめ国内外で評価された¹⁴⁾。その他、詩を中心にアラビア語とヘブライ語の双方で作品を発表し続けているドルーズ派¹⁵⁾ のナイーム・アライディ (Na‘īm ‘Araidi: 1950-) やサルマーン・マサールハ (Salmān Masālḥa: 1953-) などが活動を行っている。

以上のように、60年代からイスラエルのアラブ人は自ら文学の担い手となって作品を生み出すようになり、そのなかには少数ながらあえてヘブライ語で執筆する作家も登場した。

3. 小説の言語

小説を執筆し発表する際、どの言語を選択するかについては、イスラエルのみならず紛争を抱えた地域や他民族国家においてはつねに議論となる。G. ドゥルーズとF. ガタリは「少数民族が広く使われている言語を用いて創造する文学」を「マイナー文学」とよんだ (ドゥルーズ/ガタリ 1979: 27.)。世界的に見れば国連の公用語であり、広範に使われている言語 (アラビア語) から、話者が1,000万人に満たない言語 (ヘブライ語) で書く行為がこの定義に当てはまるかどうかは議論の余地があるが、イスラエルの少数

派として多数派の言語で書くアラブ人のヘブライ語文学は「マイナー文学」の特徴を持っていると言える¹⁶⁾。

文学と言語の関係について、日本語を母語としながらドイツ語でも詩や小説を書いている作家の多和田葉子（1960-）は、自らの執筆活動を「エクソフォニー」と呼んでいる。「エクソフォニー」とはドイツ語で「母語の外に出て行く」という意であり、多和田はあえて自分の母語の外側に身を置くことに積極的な価値を見いだしている¹⁷⁾。

しかし、イスラエルのアラブ人作家は積極的にヘブライ語を選び取った訳ではなく、彼らが生きているこの「占領」の状態が言語選択に影響を与えている。例えば、ヘブライ語で『アラベスク』を書いたシャンマースは、母語であるアラビア語文化から疎外された自分たちが、ヘブライ語を継母の言語とするに至った苦悩を吐露した¹⁸⁾。建国後まもなく生まれた世代のシャンマースは、イスラエルに取り残された自分たちアラブ人が、伝統的なアラブ文化から隔離されていると感じた。彼らにもたらされた文化はほとんどヘブライ語を経由したものである。これはシャンマースの個人的な心情のではなく、先述したパレスチナ人の抵抗詩人ダルウィーシュでさえ、イスラエルの国民詩人イェフダ・アミハイ（Yehuda Amichai: 1924-2000）から影響を受け、幼少期にヘブライ語経由で文化受容を行っていたと発言していたことと重なる（Shatz 2002: 73）。

ヘブライ語で執筆するイスラエルのアラブ人が持つ、支配言語へのアンビバレントな感覚は「エクソフォニー」という肯定的なものより、おそらく日本社会で作家活動を行なう在日コリアン作家の感覚と近いかもしれない。例えばこうした作家の一人である金石範¹⁹⁾（1925-）は、日本語で書くことを「呪縛」であるとしつつも、その言葉を使って作品を書く行為こそが、その「呪縛」を解放するのだと繰り返し述べている²⁰⁾。

一方、執筆言語について本論で扱うサイイド・カシューアは、ヘブライ語を小説の言語として選択したことを自明であると捉えている²¹⁾。70年代生まれの若手作家である彼にとって、ヘブライ語はもはや占領者の言葉あるいは継母の言葉ではなく、口語アラビア語と同様に自分たちが自由に操ることの出来るツールの一つなのかもしれない。小説の言葉ともなっている正則アラビア語で小説を書くことこそ、彼にとってみれば不可能な試みなのである。これは彼の上の世代の作家たちと異なる。

言語の選択は個人の資質や環境も関係し、これを同世代のイスラエルのアラブ人の状況に一般化することはできない。ただしカシューアのような認識が生まれる背景は、イスラエルにおける言語教育の影響がある。イスラエルの公用語はヘブライ語とアラビア語であるが、現実にはヘブライ語が国家の第一言語として機能している。イスラエルの市民であるアラブ人は、公教育でヘブライ語を第二外国語として学ぶ²²⁾。一方で、ユダヤ人は第二外国語として英語を学び、アラビア語は第三外国語である。ムハンマド・アマ

ラらの調査によると、高等学校でアラブ人が学ぶカリキュラムのおよそ半分が、聖書などを含めたユダヤ文化に関係したものだという (Amara & Mar'i 2002: 56-57.)。つまり教育の不均衡がアラブ人の言語環境においてヘブライ語の優位性を増大させたのである。カシューアはこうした社会状況で生きるアラブ人のなかから登場した。

4. サイド・カシューア (Sayyed Kashūa: 1975-) の略歴

サイイド・カシューア²³⁾ は1975年イスラエル中部のアラブ人町ティラ²⁴⁾ (アル=ティーレ) で生まれた作家で、いわゆる「イスラエル・アラブ人」の第三世代にあたる。

幼少期をティラで過ごした彼はイスラエル科学芸術アカデミーの奨学金を得、15歳のときからエルサレムでユダヤ人と共にヘブライ語で教育を受ける²⁵⁾。その後エルサレムのヘブライ大学で社会学と哲学を専攻し、卒業後はエルサレムの地方新聞コル・ハイール紙や、ハアレツ紙でジャーナリストとして活躍し、2002年、弱冠26歳で第一作目『踊るアラブ人』を上梓した。続けて2004年に『そして夜が明けると』を発表すると、ムスリムとして初めてのヘブライ語作家となったこともあり、注目を集めるようになる。

しかしながら、彼がイスラエルで最も著名なアラブ人となったのは、『アラブのお仕事』²⁶⁾ ('*avodah 'aravit*) というテレビ番組がきっかけであろう。カシューアがプロデュースしたこの番組は、イスラエルの主要民放テレビ局ケシェット (チャンネル2) で、毎週日曜の夜に放映されていた30分のコメディドラマで、2012年には第三シーズンが放映された²⁷⁾。

その後、2010年には第三作目の長編『二人称単数』を上梓する。発表後まもなくベストセラーとなり、バルンシュタイン賞 (2011) をはじめとして多くの賞を受けた。2013年現在、ハアレツ紙の週末版で毎週コラムを執筆するなど、コラムニストとしても評価が高い。

5. 匿名性と集団化

カシューアの小説の特徴として、真っ先に挙がるのは主人公の匿名性である。デビュー作の『踊るアラブ人』、第二作目の『そして夜が明けると』の両方とも主人公は名前を持たないアラブ人である。

『踊るアラブ人』は、カシューアの幼年時代をたどったようなアラブ人少年の日常とその後を描いた成長小説である。ユダヤ人の寄宿学校に送られた主人公は、周りの人びとに自分の「アラブ性」を隠しながら日々を送り、滑稽なまでもユダヤ人を模倣し続け

る。

僕は普通のイスラエル人よりもっとイスラエル人っぽい。ユダヤ人が言うには、『君は全然アラブ人に見えないね。』だそう。こう言われるといつも大喜び。それって人種差別的な発言じゃない？って批判する人もいるけれど、僕はいつもお世辞、つまり成功の徴だねって思っている。結局、これが僕のなりたかったものなんだ、ユダヤ人になることが。そうなるためにたくさん努力したし、それが最終的にうまく行ったのさ。(Kashūa 2002: 67)

主人公はあくまでも模倣を「正当化」し肯定する。ユダヤ人による襲撃に遭遇したときも彼はヘブライ語のラジオ放送局ガルガラツツ²⁸⁾を流しながらこうつぶやく。

ミラーに数珠をぶら下げてなくてよかった。ハムサ²⁹⁾やアラビア語が書いてあるものを持ってなくて。僕のはかなりユダヤ人っぽい車だし。そう、スバル。古いプジョーやオペル・アストラじゃなくてよかったよ。(Kashūa 2002: 113)

主人公にとってアラブ人の印となるものはすべて隠蔽する対象である。だからこそ、妻がユダヤ人が多い地域でアラビア語を話すことも快く思わない。その卑屈なまでのコンプレックスは滑稽を通り越して哀れですらある。それでもなお主人公は模倣し見栄を張り続ける。例えば、体調が優れない妻を病院に連れて行った際の場面はこうである。

妻が検査を受けに行ったので、僕は出来るだけ離れたところ、一番遠くにあるベンチの端っこで待っていることにした。そして、こういうときのために取っておいたヘブライ語の本を取り出すと、僕はおもむろに読み始める。それは、ほかでもない『ヴィトゲンシュタインの甥』³⁰⁾という本であった。医者が通りかかったらおそらく感心するだろう。出だしからではなく、終わりのほうを開くんだ。間違ってもちょうど今読み始めたと思われぬように。僕は本を凝視した、アイデンティティを隠すだけじゃなくて他人の視線を避けるように。それが僕に必要なことなのだ。(Kashūa 2002: 149-150)

匿名の主人公が持つ、アラブ人への嫌悪とユダヤ人への盲目的な賞賛を物語全体にちりばめつつ、そのユダヤ人とアラブ人を集団名詞で描くことで個性が失われていく様子を、カシューアは読者に示す³¹⁾。表題の「踊るアラブ人」もまた、主人公がナイトクラブで見かけた、忌むべき粗野で下品なアラブ人の若者のことである。そしてこの徹底的な匿名性と集団化は、アラブ人の戯画化やユダヤ人の模倣に集約されている。

カシューアの長編二作目『そして夜が明けると』(2004年)は、『踊るアラブ人』の続編とも考えられる設定で物語がはじまる。第二次インティファダ(2000年)を経て、エルサレムでユダヤ人とともに暮らすことに疑問を感じた主人公のアラブ人「ジャーナ

リスト」は、故郷の村への引っ越しを決めた。その準備のため、彼が家族とともに村に帰省していたそのとき、村の出入り口がイスラエル軍に封鎖される。外界との遮断は物理的なものだけに留まらず、電話やメールなども軒並み不通となる。出入り口が封鎖されて村から出ることもできず、負傷者の噂すらあるにもかかわらず、なぜか彼らの現状は報道の対象とならない。表向き村には「何も起こっていない」ことになっている。ニュースで扱われるのはガザや西岸、あるいは他のアラブ諸国で起こった武力衝突や、イスラエルとパレスチナの和平交渉についてはばかりであった。封鎖の初日、検問所の近くまで来てはじめてその事態に気がついた主人公はこう憤る。

・・・新聞社のデスクに電話する前に、車のラジオで朝のニュースを聴こうと早足で近づいた。今はクラクションやら邪魔な音はしない。封鎖されたという知らせは明らかに広まっています。人びとは道の真ん中で車を止めている。どこに行きやいいっていうのだ？

ニュースでは、村で起きていることに関して何も言わない。西岸の町のことや閣議、ドル為替の高騰については報じていたが、イスラエルのアラブ人についてはなにもなかった。・・・(Kashūa 2004: 52)

封鎖や外界との遮断という暴力的状況と対比するような村の静かな日常が、この忘れ去られてしまったアラブ人たちの戸惑いを強調する。自分たちはイスラエル社会で常に「脅威」であると見なされているのに一人のジャーナリストもコメントを取りにこないのはなぜなのか、主人公らは訝る (Kashūa 2004: 189.)。先ほど言及した匿名性や集団化は、ここでは忘れ去られたイスラエルのアラブ人、つまり「透明な」集団に表されている。物語は、イスラエルとパレスチナの和平交渉が合意に達し、封鎖されていた村はイスラエルから新しいパレスチナ国家に編入されることが決まって幕を閉じる。パレスチナ人にとって悲願の独立も、彼ら村のイスラエルのアラブ人にとっては「寝耳に水」の出来事であった。『そして夜が明けると』でカシューアが描いたのは、イスラエルから受動的に分離され、それをニュースで一方向的に伝えられる、彼ら「透明な存在」として蚊帳の外におかれたイスラエルのアラブ人の姿そのものであった。

6. 記名と二面性

前二作と異なり、2005年にハアレッツ紙で発表した短編『ヘルツェル真夜中に消える／シンデレラ』³²⁾の主人公はアラブ人ではなく名前を持ったユダヤ人である。ただしその名は、ヘルツェル (ユダヤ人の名) とハリーワ (アラブ人の名) を合わせたちぐはぐなものである。不妊に悩む主人公の母が、たとえ半分アラブ人であってもよいから息子が

欲しいのだ、と嘆きの壁で熱心に祈った結果、息子は昼間はユダヤ人、真夜中にはアラブ人になるという特異体質を持って生まれた。普段は穏やかで、一途に恋人を愛するユダヤ人青年が、真夜中を境にシンデレラのような変貌を遂げ、イスラエルの体制に批判的で、不特定多数の女性と関係を持つ粗野なアラブ人になる。変わるのはあくまでも内面や立ち居振る舞いであり、外見が変化する訳ではない。真夜中になるとヘブライ語が全く理解できず、英語やアラビア語を話すようになることが、唯一眼に見える変化である。

真夜中、ヘルツェルは全くの別人になる。とても言葉だけでは説明できない。理解するにはその場に居合わせなきゃいけない。自分ではよくわかっている、真夜中に自分が別の人間となり、別の感情を持つことを。別の恐怖と別の願望を持つことを。いくつかの変化のなかで、唯一はっきり違っているのは言葉だ。真夜中から夜明けにかけて、彼はヘブライ語がまったくわからなくなる。「OK」、「シェケル」³³⁾、「検問所」^{マフソム}以外は。なぜかって？ アラブ人もこうした単語をまるで自分たちの言葉みたいに使っているんだから。(Kashūa 2005)

ある日主人公は、常に自分と夜を過ごそうとしないことに不信感を抱いた恋人のノガに、二重人格という秘密を打ち明けた。はじめはまったく信じていなかった彼女は、その晩アラブ人になったヘルツェルについて東エルサレムへ向かい、彼が決して冗談を言ったのではないことに気がつく。

アラビア語をまるで生まれたときから使っているかのように操って、次から次へと挨拶をし、握手をして回り、いつものテーブルのところまで辿り着いた男の後ろを、彼女はただ付いていった。ヘルツェルは明らかにアラブ人とわかる若者数人と抱擁し、挨拶のキスを交わしていた。何かが決定的に違う。外見は全く変わっていないのに、ヘルツェルは全く別人になってしまっている。ノガは会話に付いていけず呆然とし、理解できない言葉に囲まれ啞然とした。ガザやラマッラーという単語が聞こえたのは一度ではなかった。ノガは自分の恋人に目を向ける。そこに一時間前にいた人のことを思い出そうとして、アラク³⁴⁾をぐいっと飲んでタバコを吸う、初めて見る彼の姿を見つめていた。ハリーワのほうは、彼女をちっとも見ていなかった。明らかに無視していた。偶然目が合ったときも、彼が疑心と嫌悪の眼を自分に向けているように、ノガは感じていた。(Kashūa 2005)

主人公の二つの人格には全く接点がなく、混じり合うこともない。カシューアは二作目では自分たちイスラエルのアラブ人が社会で疎外・断絶されている集団だということ「封鎖」や「分離」の物語で描いたのに続き、本作ではアラブ人とユダヤ人の「ヤーヌス」³⁵⁾というファンタジーによって、この両者の決定的な断絶を一人の人間の内部に込めたのである。

こうしたアイデンティティのねじれは、2010年に出たカシューアの最新長編『二人称単数』でも試みられている。作品では、はじめて二人の主人公が登場する。そして一章ごと交互に、匿名のアラブ人「弁護士」の物語が三人称で、ソーシャル・ワーカーのアラブ人、アミール・ラハブの物語が一人称で語られる。あるとき「弁護士」が、古書店で「ヨナタン」と記名のあるトルストイの『クロイツェル・ソナタ』³⁶⁾に挟まっていた、彼の妻ライラが書いた恋文を見つけ、その不貞を疑って浮気相手を捜し始めることと、植物状態のまま何年も生き続けているユダヤ人の青年ヨナタンの世話をアミールが任されたこと、この二つの出来事からそれまで何の接点もなかった二人のアラブ人の物語が交錯する。

富と名声を得、美しい妻と子どもに恵まれた成功者であるはずの「弁護士」は、やはり匿名なままアラブ人であり続ける。キング・ジョージ通りに事務所を構え、高級車に乗り、どんなに模倣しようともなおユダヤ人にはなることが出来ない。ユダヤ人の友人に無教養だと悟られないために、ハアレツ紙の読書欄をチェックし、西欧の名作小説を買いあさる。人をもうらやむようなその人生にもかかわらず、不眠や嫉妬、嘲笑への恐怖などから彼の精神は危ういところでぎりぎりバランスを保っている。

他方、アミールは「弱者」としてのアラブ人を表している。「弁護士」がイスラエル社会で成功し、さまざまな恩恵を受けているのに対し、大人しく、引っ込み思案のアミールは何をやってもうまく行かず、将来に漠然とした不安を抱く。しかし、自殺して植物状態にあるアシュケナジー³⁷⁾のユダヤ人ヨナタンの介護がきっかけとなり、アミールには新たな人生が開けることになる。彼はヨナタンのIDを不正に利用し、その死によって自ら「ヨナタン」となったのである。

夜眠れないと、僕はヨナタンについてあらゆることを学んだ。部屋にあった紙という紙は全部読んでしまった。引き出しに入っていたノートや文書もすべて。ヨナタンは僕と同じ1979年生まれ。IDカードの四角くて小さな写真のなかで、笑わないように一生懸命、真剣な顔を作っていた。その目はまるで、16歳の青年である自分に成り代わるのだと宣言した僕のことを憂いているようだった。母ラヘル、父ヤアコヴ。住所は変わっていない。それから、「レオム」³⁸⁾の欄には「ユダヤ」とあった。(Kashūa 2010: 174)

アミール＝「ヨナタン」はアラブ人であった頃はとうてい叶わなかったベツァレル³⁹⁾(Betsalel) 芸術学校への入学を果たし、そこで新進気鋭の写真家として未来を嘱望される。ヨナタンの実母ラヘルもこうした一連の彼の行動を「臓器移植のようなもの」だとして黙認する (Kashūa 2010: 266.)。

『ヘルツェル真夜中に消える／シンデレラ』では「ヤーヌス」のごとく分裂した一人

の人間を描写し、『二人称単数』では弁護士とアミール、アミールとヨナタン、ヨナタンと弁護士の三者が織りなすアイデンティティの葛藤を表現した。アシュケナジーのユダヤ人ヨナタンに成り代わったことで、アラブ人のアミールには明るい将来が約束された。ただし彼はいつそのことが露呈するかと怯えながら生涯暮らしていかなければならない。そのアミールにアイデンティティを「譲った」ユダヤ人ヨナタン自身は若くして突然首を吊り、植物状態になった。「弁護士」がいくら希求してもなれない、エルサレム生まれの裕福なアシュケナジー・ユダヤ人であったヨナタンが自殺した理由は明確には語られない。「弁護士」の羨望の的であり、アミールの可能性の元となったユダヤ人青年でさえも深い心の闇を持っていたことこそが、この物語にカシューアが仕掛けた痛烈な皮肉だとも言える。

カシューアは、ユダヤ人を模倣する「弁護士」や、ユダヤ人になることで人生をリセットしたアミールなど、アラブ人はユダヤ人の目の前にいる「二人称」であり、それぞれ「個」性をもった個人＝単数の集まりなのだという思いを作品のタイトル「二人称単数」に込めたのかもしれない。それでもなお、それぞれの個性は顧みられず集団の内に埋没してしまうのである。ユダヤ人を模倣する「弁護士」も、ユダヤ人に「成り代わった」アミールも、ユダヤ人の「まがいもの」として生きていく。これが、カシューアが描いたイスラエルのアラブ人の姿なのである。

7. 結論

カシューアが描いた世界は、イスラエルのユダヤ人社会で生きる若い世代のアラブ人が中心となっている。彼らにとってはパレスチナの抵抗詩人マフムード・ダルウィーシュや、エミール・ハビービーはまったく意味をなさない。『踊るアラブ人』のなかに、以下のくだりがある。

家にいるときはよく、父のところから本を何冊か奪ってくるんだ。アラビア語を読むのなんてまっぴらだけど、その本の中身はちらっと見とかなきゃ。マフムード・ダルウィーシュがなぜ偉大だとされているのか、それからどうしてエミール・ハビービーがイスラエル賞⁴⁰を取ることができたのか知るためにね。(Kashūa 2002: 77.)

もはやカシューアにとって、継承すべきアラブ文化は明白ではない。しかし一方で、イスラエル社会に横たわるユダヤ人とアラブ人の深い断絶も感じている。だから第一作ではステレオタイプのアラブ人とユダヤ人を匿名で描くことで、集団的なアイデンティティによってのみイスラエルのアラブ人が捉えられていることを示した。それは後の

『アラブのお仕事』で痛烈に描かれるステレオタイプのイスラエル社会と同様の視点である。彼の描くイスラエルのユダヤ人社会に生きるアラブ人は、隔離され、見えない壁で囲われている。それを寓話的に描いたのが『そして夜が明けると』である。

一方で、カシューアもまた他のイスラエル・アラブ人作家と同様、自分がイスラエル市民であることにある種の居心地の悪さを感じている。だからこそ彼の作品も「私は誰?」という問いが重要なテーマとなる。執筆する言語が異なっても、イスラエルのアラブ人作家は「私は誰?」、つまり「このイスラエル社会に置いて「私」という存在は何なのか?」という共通の問いを抱えている。そしてそれは、多数派のなかに取り残され、同胞と分断されてしまった彼らの現状を鑑みれば当然のことだとも言える。

カシューアの一作目、二作目には「私は誰?」、つまり「イスラエルのアラブ人とは誰なのか?」という問いが直接的に語られていた。しかし作家として成長するにしたがってむしろ、イスラエルのアラブ人という集団を固有化することへのアンチテーゼとして「誰でもない私」が語られているのである。

『ヘルツェル真夜中に消える／シンデレラ』のアラブとユダヤの「ヤーヌス」や、『二人称単数』のアシュケナジーに成り代わるアラブ人は、あまりにも非現実的な人物設定である。また『そして夜が明けると』では、イスラエルとPA（パレスチナ自治政府）が合意に達し、主人公の住む閉鎖されたアラブ人村がパレスチナの独立国家に統合されるといった、近未来の空想世界が描かれる。前の世代とは異なる言語観とその作品世界を描いたカシューアではあるが、冒頭で引用している「宇宙」に飛ばされてしまった主人公の語りを物語にしたハッピービーや、入れ子細工のごとく物語のなかにさまざまなエピソードを散りばめたシャンマースと同様に、イスラエルのアラブ人の「宙ぶらりん」な状態を非現実的なファンタジーで表現した。その点においては、彼もまた先達のイスラエル・アラブ人作家の系譜を歩んでいる一人なのだと言えよう。

参考文献（欧文、日本語文献の順）

- Adiel, Yael. (2009), “‘Al Po’etīkah ve-Poliṭīkah shel Gishut le-Lashon: Qri’a be-Ṭurim me’at Sayed Qashua,” *Te’oria u-Bikoret*, 34, pp.11–41. (ヘブライ語)
- Al-Haj, Majid. (1995), *Education, Empowerment, and Control: The Case of the Arabs in Israel*, New York: State University of New York Press.
- Alsarras, Nader. (2011), “Interview with Sayed Kashua: For Absolute Equality in All Areas of Life”, *Qantara.de*, 13th July. <http://en.qantara.de/For-Absolute-Equality-in-All-Areas-of-Life>

- [Life/16546c16790i1p169/index.html](#) (2012年3月7日アクセス)
- Amara, Muhammad. & Abd Al-Rahman Mar'i. (2002), *Language Education Policy: The Arab Minority in Israel*, Kluwer Academic Publishers.
- Assaf, Michael. (1961), "The Arabic Press in Israel," *International Communication Gazette*, 7, pp.23-25.
- Azaiza, Faisal. & Rachel Hertz-Lazarowitz, et al. (2011), "Attitudes towards bilingual Arab-Hebrew Education in Israel: A Comparative Study of Jewish and Arab Adults," *Language, Culture and Curriculum*, 24:2, pp.179-193.
- Berg, Nancy E. (1996), *Exile from Exile: Israeli Writers from Iraq*, Albany: State University of New York Press.
- Central Bureau of Statistics (CBS) ed.(2011), *Israel in Figures*. (Booklet)
- Hever, Hannan. (1987), "Hebrew in an Israeli Arab Hand: Six Miniatures on Anton Shammas's 'Arabesques'," *Cultural Critique*, no.7, The Nature and Context of Minority Discourse II, pp.47-76.
- Hochburg, Gil Z. (2010), "To Be or Not to Be an Israeli Arab: Sayed Kashua and the Prospect of Minority Speech-Acts," *Comparative Literature*, no.62, no.1, pp.68-88.
- Jayysi, Salma Khadra. (1992), *Anthology of Modern Palestinian Literature*, New York: Columbia University Press.
- Ḳashuā Sayed. (2002), *'Aravim Rokdim*, [踊るアラブ人], Moshav Ben-Shemen: Modan Publishing House Ltd. (ヘブライ語)
- (2004a), *Ve-Yihi Boqer*, [そして夜が明けると], Jerusalem: Keter. (ヘブライ語)
- (2004b), *Dancing Arabs*, New York: Grove Press.
- (2005), "Hertsī Ne'elam be-Ḥatsot," [ヘルツエル真夜中に消える], *Ha'arets*, 3 Oct. <http://www.haaretz.co.il/misc/1.1048468> (2012年3月7日アクセス) (ヘブライ語)
- (2006), *Let It Be Morning*, New York: Grove Press.
- (2010), *Guf Shenī Yahīd*, [二人称単数], Jerusalem: Keter. (ヘブライ語)
- (2012), *Second Person Singular*, New York: Grove Press.
- Kayyal, Mahmoud. (2008), "'Arabs Dancing in a New Light of Arabesques': Minor Hebrew Works of Palestinian Authors in the Eyes of Critics," *Middle Eastern Literatures*, 11-1, pp.31-51.
- Mantsūr, 'Atallāh. (1959), "Pa'amaym Kafe," *Keshet*, (ヘブライ語)
(マンスール、アタラ／母袋夏生訳「コーヒー二つ」『ナマール』13号、神戸・ユダヤ文化研究会、2008年、73-78頁。)

- (1966), *Be'Or Hadash*, [新たな光のもとで], Tel Aviv: Karni Publishers LTD. (ヘブライ語)
- Mar'i, Sami Khalil. (1978), *Arab Education in Israel*, New York: Syracuse University Press.
- Omer-Sherman, Ranen. (2010), "Paradoxes of Jewish and Muslim Identities in Israeli Short Stories," *Peace Preview; A Journal of Social Justice*, 22: 4, pp.440-452.
- Rottenberg, Catherine. (2008), "Dancing Arabs and Spaces of Desire," *TOPIA*, 19, pp.99-114.
- Shamās, 'Anton. (1979), *Sheṭaḥ Hefker*, [緩衝地帯], Tel Aviv: ha-Ḳibbutz ha-Me'uḥad. (ヘブライ語)
- (1986a), '*Arabeskot*, [アラベスク], Tel-Aviv: 'Am 'Oved. (ヘブライ語)
- (1986b), "'Ashmat ha-Babūshka," [マトリョーシカの罪], *Polītikah*, no 5-6, pp.44-45. (ヘブライ語)
- (1988), "Interview with Dalia Amit", *Prōzah*, May-June, pp.73-78. (ヘブライ語)
- Shaked, Gershon. (2000, 2008), *Modern Hebrew Fiction*, London: Toby Press.
- Shatz, Adam. (2002), "A Love Story between an Arab Poet and His Land," *Journal of Palestine Studies*, vol.31, no.3, pp.67-78.
- Snir, Reuven. (1995), "'Hebrew As the Language of Grace': Arab-Palestinian Writers in Hebrew," *Prooftexts*, 15, pp.163-183.
- (2001), "'Postcards in the Morning': Palestinians Writing in Hebrew," *Hebrew Studies*, 42, pp.197-224.
- (2002), "'My Heart Beats with Love of the Arabs': Iraqi Jews Writing in Arabic in the Twentieth Century," *Journal of Modern Jewish Studies*, vol.1, no.2, pp.182-203.
- (2007), "'Mosaic Arabs' between Total and Conditioned Arabization: The Participation of Jews in Arabic Press and Journalism in Muslim Societies during the Nineteenth and Twentieth Centuries," *Journal of Muslim Minority Affairs*, vol.27, no. 2, pp.261-295.
- Sokoloff, Naomi B. (2010), "Jewish Character?: Stereotype and Identity in Fiction from Israel by Aharon Appelfeld and Sayed Kashua," in Susan Anita Glenn and Naomi B. Sokoloff eds. *Boundaries of Jewish Identity*, Seattle: University of Washington Press, pp.43-63.
- Spolsky, Bernard. and Elana Goldberg Shohamy. (1999), *The Languages in Israel: Policy, Ideology and Practice*, Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Storey, Meg. (2010), "Playing Wii with a Gun to His Head: An Interview with Sayed Kashua," *World without Borders* (The Online Magazine for International Literature), Sep. 20th. <http://wordswithoutborders.org/dispatches/article/playing-wii-with-a-gun-to-his-head-an-interview-with-sayed-kashua> (2011年12月15日アクセス)

- 臼杵陽『見えざるユダヤ人：イスラエルの《東洋》』平凡社、1998年。
- カナファーニー、ガッサーン／ 奴田原睦明・高良由美子訳「占領下パレスチナにおける抵抗文学」、野間宏編『現代アラブ小説選』創樹社、1974年、339-392頁。
- 金石範『ことばの呪縛：「在日朝鮮人文学と日本語」』筑摩書房、1972年。
- 『民族・ことば・文学』創樹社、1976年。
- シャマース、アントーン／臼杵陽訳「二言語解決策」『みすず』410号、みすず書房、1995年、2-18頁。
- ジュリス、サブリ／若一光司・奈良本英佑訳『イスラエルのなかのアラブ人』サイマル出版会、1975年。(Jiryis, Sabrī. (1966), *ha-'Aravim be-Yisra'el*, Haifa: Al-Ittihad.)
- 多和田葉子『エクソフォニー：母語の外へ出る旅』岩波書店、2003年。
- ドゥルーズ、ジル、フェリックス・ガタリ／宇波彰訳『カフカ：マイナー文学』法政大学出版局、1978年。(Doruze, Gil & Felix Gatari. (1975), *Pour une littérature mineure*, Paris: Les Éditions de Minuit.)
- ハビービー、エミール／山本薫訳『非楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事』作品社、2006年。(Ḥabībī, 'Imil. (1974), *Al-Waqā'ī al-Gharībah fi-Ikhtifa' Saīd Abī al-Nahs al-Mutashā'il*, Beirut: Dar Ibn Khaldun.)

注

- 1) イスラエルが建国するまで、パレスチナにはおよそ100万人のアラブ人が居住していた。そのおよそ8割が難民化したという。2010年末の統計では、イスラエルの人口7,836,000人のうち、1,610,000人がアラブ系の住民となっている。CBS [2011] 参照。
- 2) 1948年から66年まで、イスラエルのアラブ人地区は軍の統治下に置かれ、実質的には占領状態にあった。イスラエル軍は、1945年に制定されたイギリス委任統治時代の緊急法をそのまま適用し、アラブ人の居住区を分割、それぞれの間の移動を原則的に禁止した。詳しくは(ジュリス1975: 49-99)を参照のこと。
- 3) 作家ではイラクで活動したジャブラー・イブラーヒーム・ジャブラー (Jabrā Ibrāhīm Jabrā: 19120-1994) や、アッカー出身でレバノンやキプロス、イラクでジャーナリストとしても活躍したサミーラ・アッザーム (Samīra 'Azzām: 1924-1967) などがいる。
- 4) カナファーニーは、イスラエルのアラビア語文学は政府によって奨励されているが、そもそも媒体となる出版物のほとんどがヒスタドルート(イスラエル労働総同盟)や共産党などイスラエルの政党関連のものであり、あくまでも政府の検閲を受けたものに過ぎないと批判した。イスラエルのアラブ文学者ルーベン・スニールも、イスラエルが建国してからのアラビア語出版の状況について、政党の機関紙ではあったが故、その出版物に掲載された文章は、アラブ人とユダヤ人の融和を促す目的のものである

が、それはあくまでも政府の意向に沿うもののみであったと分析している (Snir 2007: 282)。ちなみに、出版媒体の主なものとして、ヒスタドルート発行の *al-Yaum* (日刊)、*al-Hadaf* (月刊) や共産党発行の *al-Ittihād* や *al-Jadīd* があった。

- 5) 他のアラブ地域同様パレスチナでも、抵抗詩が広く浸透する以前から詩は伝統的に盛んであった。例えばハリール・サカーキーニー (Khalīl Al-Sakākīnī: 1878-1953) や、ナブルスの名家の出であるイブラーヒーム・トゥーカーン (Ibrāhīm Ṭūqān: 1905-1941)、ファドゥワー・トゥーカーン (Fadwā Ṭūqān: 1917-2003) 兄妹などは、イスラエル建国以前のパレスチナにおいて既に積極的に詩作活動を行っていた。
- 6) イラク系ユダヤ人がイスラエルのアラビア語の出版活動に大きく関わっていたのは、彼らの多くがバグダードなど都市部の知識人階級だったことが影響していた。他のミズラヒーム (中東諸国出身のユダヤ人)、例えば北部山岳部で閉鎖的な共同体を形成していたイエメン出身のユダヤ人や、モロッコ出身のユダヤ人の多くは識字率も低かった。また、比較的知識人階級が多かったアルジェリアのユダヤ人は宗主国のフランスに渡ったためイスラエルには移民しなかった。故に、結果的に作家など知識人階級のアラビア語話者のユダヤ人はイラク系が中心となっていった。アラビア語で文学作品を執筆し続けた作家としては、サミール・ナッカーシュ (Samīr Naqqāsh: 1938-2004) やイツハク (イスハーク)・パール＝モシェ (Ishāq Bār-Moshe: 1927-2003) がいる。彼らイラク出身作家の文学活動に関してはベルグ Berg [1996] やスニール Snir [2002] らの論稿を参照せよ。
- 7) エミール・ハビービーとともにイスラエルの文学運動 *Al-'Ard* を興した。イスラエルに拘束後は国を去り、離散パレスチナ人となった。
- 8) 1967年にイスラエル領となったヨルダン川西岸・ガザでは、サハル・ハリーフエ (Saḥar Khalīfē: 1942-) や、ヤヒヤ・ヤフルーフ (Yahya Yakhīlūf: 1944-)、リアナ・バドル (Liāna Badr: 1950-)、イブラーヒーム・ナスラッラー (Ibrāhīm Naṣrallāh: 1954-) が小説を発表している。
- 9) 19世紀末のヘブライ語による文化活動の中心はロシア・東欧のユダヤ人知識人が中心であった。たとえばワルシャワやオデッサでは多くのヘブライ語の出版物が発行されている。パレスチナの地がヘブライ語文化の中心となったのは、エリエゼル・ベン＝イエフダーの活動に、1910-20年代に移民してきたユダヤ人が加わって以降のことである。
- 10) 現代ヘブライ文学に関して、Shaked [2000, 2008] は18世紀末から現代にかけての歴史とその主題を体系的に分類、網羅している。
- 11) マンスールは1932年にガリラヤ地方のマロン派キリスト教徒の村ジシュで生まれた (彼自身の家族は正教徒)。彼の生い立ちと作家活動を始めた契機などは彼の英語による自伝『夜明けを待ちわびて』(1975) に詳しく述べられている。
- 12) マンスールのデビュー作は1962年に出版されたアラビア語小説『そしてサミーラは留まった』である。さらに、1959年に既に文学誌『虹』(*Keshet*) にヘブライ語の掌編「コーヒー二つ」(*Pa'amaim Kafe*) が掲載されている。本作はアラブ人によるヘブライ語小説として出版された初めての作品である。
- 13) 1950年イスラエル北部のキリスト教徒の村ファッスータに生まれる。1974年に初の詩

集『覚醒と睡眠の囚人』（*'Asīr Yaqẓatī wa-Nawmī*）をアラビア語で出版、さらに同年ヘブライ語の詩集『ハードカバー』（*Kerikhāh Kāshāh*）を発表。1979年には詩集『緩衝地帯』（*Sheṭaḥ Hefker*）を出版、翌年1980年にレヴィ・エシュコール賞（優れたヘブライ語の文学作品に送られる賞）を受賞している。1982年にはヘブライ語の子供向け童話『世界で一番の大嘘つき』（*ha-Shakran Hakhi Gadol ba-'Olam*）を出版した。1988年にイスラエルを離れて以来、アメリカ合衆国のミシガン大学で教鞭をとりながら主に翻訳者として活躍している。

- 14) 出版後一年も経たずしてイスラエルで21,000部を売り上げるベストセラーとなった後、アメリカでも英訳が話題となり、1988年のニューヨーク・タイムズの「その年の1冊」に選ばれた。現在、英語を含む7カ国語に翻訳されている。
- 15) イスラームの異端派とされ、ルーツが10世紀のファーティマ朝にさかのぼるイスラームから分派した集団。シーア派イスラームのイスマーイール派から分派した。ファーティマ朝のカリフ、ハーキムを神格化、輪廻転生を信じコーランを否定するなど独自の教義を持つ。アラビア語が母語で人口はシリアが最も多い。イスラエルではハイファとガリラヤ湖周辺（マガル、ペキインなど）、ゴラン高原（マジユダル・シャムスなど）にコミュニティがある。最大のはハイファのカルメル山に位置し、約13,000人が暮らしているダリヤット・カルメル-イスフィヤ（*Dalyat El-Carmel-Isfiya*）である。ダリヤット・カルメルとイスフィヤは2つの別の村であるが、隣接し、共にドルーズの村であるため同一地域とされることが多い。
- 16) 例を挙げると、イスラエルのアラブ人によるヘブライ文学のうち、特にシャンマースの『アラベスク』に関して、この作品が「マイナー文学」の一つとして捉えられるかどうかを検討した Hever [1987] などがある。
- 17) 多和田は「母語ではない言葉で書くことになったきっかけがたとえ植民地支配や亡命などにあったとしても、結果として生まれてくるものが面白い文学であれば、自発的に「外へ」出て行った文学と区別する必要はないのではないか。」とし、「「ころんでもただでは起きない」したたかさ」で作家が押し付けられた言語で作品を書くことを「エクソフォン文学」として肯定的に捉えるべきだと述べた（多和田 2003: 7.）。
- 18) シャンマースは特にイスラエルが建国してから1967年に西岸・ガザが併合されるまで、イスラエルのアラブ人がアラブ文化に接触する手だてを失ってしまったのだと指摘した。一方ヘブライ語で作品を書くことにもある種の「厚かましさ」が必要であると述べた（Shamās 1988: 74.）。しかし彼は同時に「第三世界——ぼくはこの用語をきちんと定義せずに使っているが——の作家たちは植民地本国の内側からかつての植民地主義者の文化を払拭しようとしている。この作家たちにとって植民地主義者の脱領域化こそが自らの領域を主張しうる唯一の方法なのだ。」（シャマース 1993: 15.）と、ヘブライ語で文学を発表することを積極的に評価した。ただし、このシャンマース、マンスールとも一作でヘブライ語の小説を書くことをやめてしまった。これはアラブ人がヘブライ語で書くことの困難さの例である。
- 19) 大阪生まれの在日コリアン。代表作は済州島で起こった四・三事件を題材とした大著『火山島』（1983-1997）など。

- 20) この件に関して金は1972年『言葉の呪縛』という評論集を出している。さらに金は70年代から、自分たちが在日朝鮮人の文学は日本文学なのかという問いに対して、「日本語文学」であると繰り返し発言している（金 1976: 50-68、初出は1974年）。
- 21) カシューアは2010年のインタビューで「ヘブライ語以外ほとんど読まないし英語も読まない。だから僕にとっては翻訳文学が適しているのだ。」（Storey 2010）と発言している。
- 22) イスラエルのアラブ人学校では第二学年から現代ヘブライ語の授業が始まる。アラビア語が母語である彼らは第二外国語である英語の習得の前に、現代ヘブライ語を学ぶのである。一方、ユダヤ人学校では、第七学年から三年間アラビア語を学ぶ。アラブ人に比べると高学年での開始である上、言語習得に関する効果は疑問視されている。こうして、二つの公用語である現代ヘブライ語とアラビア語の習得差は徐々に顕著となり、アラブ人は書き言葉としてのアラビア語の習得がすすまなくなっていく。アラビア語は文章語である文語と、口語の差異が大きい言語である。アラブ人の若年層を中心に文語の理解力が落ちていることと、アラビア語の口語に流入している現代ヘブライ語の表現の問題は、こうした状況がまねいているのである。イスラエルのアラブ人の教育に関しては、Khalil Ma'ri [1978]、言語教育に関しては Spolsky & Shohami [1999]などを参照。
- 23) 現在最も注目されるイスラエル・アラブ人作家であり、著作活動を続けている彼に関しては、シャンマースの作品と比較して、その低い文学性を批判した Kayyal [2008]、彼の新聞のコラムに注目した Adiel [2009]、都市と農村など作品に描かれた「空間」について論じた Rottenburg [2008]、作品からアラブ人とユダヤ人の決定的な断絶を読み取った Hochberg [2010] などがある。また、アルモグ・ベハル (Almog Behar: 1978-) の『我が輩はユダヤ人である』(’Ana min al-Yahūd: 2005) と比較した Omer-Sharman [2010]、アハロン・アッペルフエルトの『変身』(1968) との比較を行なった Sokoloff [2010] など、ユダヤ人作家の作品とともに議論を進めたものがある。
- 24) イスラエル中部にある町。人口は22,600人（イスラエル統計局、2009年末）であり、住民のほとんどをムスリムが占めている。
- 25) イスラエルのアラブ人子弟のうち、優秀な生徒はしばしば都市部のユダヤ人学校に送られることがある。カシューアもその一人であった。
- 26) ヘブライ語の俗語で「いい加減な仕事」の意。
- 27) 第一シーズンは2007-8年、第二シーズンは2010年に放映された。主人公のイスラエル市民のアラブ人ジャーナリストが、彼の家族や周りのユダヤ人とともに、さまざまなトラブルを巻き起こす痛烈なコメディドラマ。
- 28) イスラエル国防軍提供のラジオ局。24時間放送で、主に大衆音楽や定時のニュースなどが放送されている。
- 29) 「ファーティマの手」とも呼ばれる、手のなかに目を描いた「妬み」をはじく護符。中東地域全域で見られる民間信仰の一種。壁飾りやアクセサリーなどがある。
- 30) パウル・ヴィトゲンシュタインの友人であったトーマス・ベルンハルトによる実在の伝記小説。作品では、死期が近づいた作者が友人の狂人ぶりを書き綴るとともに、当時のウィーンにおけるさまざまな問題やそれに対する不満を語っている。

- 31) この点に関しては Hochburg も指摘している (Hochburg 2010: 74.)。また、Omer-Sharman は、A. B. イェホシユア (A. B. Yehoshua: 1936-) の『愛人』に登場するアラブ人ナームとの共通点を指摘した (Omer-Sharman 2010: 450.)。
- 32) 英語版のタイトルは『シンデレラ』。第一作、二作を続けざまに出版したものの、第三作目の発表までには六年の歳月がかかっている。新聞小説にもかかわらず、その間に発表されたこの作品を転換点として評価するものも多く、前述した Hochburg [2010], Omer-Sharman [2010] などでも取り上げられている。
- 33) イスラエルの通貨単位。
- 34) 中東地域でよく飲まれるぶどうを原料とした蒸留酒の一種。
- 35) 頭の前後に顔を持つ双面神。ローマ神話では物事の始まりを司る神として知られる。
- 36) 1899年に発表されたロシアの作家レフ・トルストイの短編小説。友人と妻の浮気に気付いた男性が妻を殺してしまい、それを汽車の中で告白するという物語。
- 37) ヘブライ語で「ドイツ系」の意。一般的にはヨーロッパ出自のユダヤ人のことを指す。
- 38) イスラエルでは16歳以上の居住者すべてにIDカードの携帯が義務づけられている。この「レオム」(*le'om*) は2003年以前に発行されたIDカードに記載されていた項目で、通常 nationality と訳される語であるが、実際は宗教籍／民族籍に近い意味を持つ。ちなみにイスラエルのアラブ人の「レオム」は通常「アラブ」あるいは「ドルーズ」である。この「レオム」を巡る問題に関しては臼杵 [1998] が詳しい。
- 39) 1906年に創立されたエルサレムの芸術学校。
- 40) イスラエルで最も権威のある文学賞の一つ。エミール・ハビービーは1992年に受賞している。